なれない山の仕事に疲れて、草むらにたおれかかったときもありました。そんなとき、リンは、私は一家の人々の中心なんだ、まだ、私は若いんだから、とまた重い腰をあげて、山道をいそぐのでした。

ある暑い日のことです。ようやく運んできたかますを下ろすと、かますの中の桑の葉は、暑さと背中の体温にむされて、すっかりしおれきっていました。これでは売り物になりません。

「どうしよう。これでは農家の人は買ってくれないだろう。」

今日もみんなに食事をさせなければならないのに、これではお金にならないと思うと、ぼうぜんと立ちすくんでしまいました。空を仰ぐと、夏の太陽が青空の中に輝いていて、眼がチカチカと痛んできます。

「何とか、お金を作らなくてはならない。そうだ、この帯で財布を作れば売れるかもしれない。」